#15

アツモリソウ

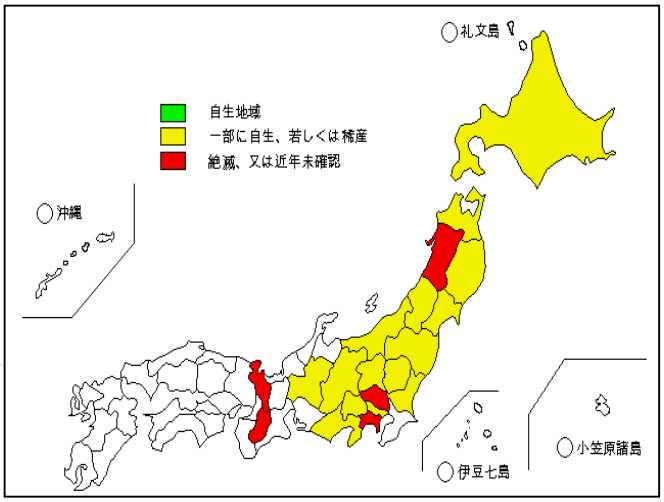
絶滅危惧1B類（EN）

Cypripedium macranthum

アツモリソウ（長野県　10.5/29）

東日本の亜高山帯に自生する大型の地生蘭です。日本の野生蘭の中でも1,2を争う花の大きさと美しさ、また栽培の難しさ、亜高山帯の厳しい環境に自生する気高さから山野草の女王とも称される代表的な蘭です。草丈は30～50cm程度で6～7月頃にピンクで丸いパフィオペディラム属特有の袋状の花を咲かせます。冬期は地上部は枯死し越冬します。

このあまりの美しさが仇となり、昭和40年代の山野草ブームで盗掘されつくし現在では人の保護下にない自然状態での自生にはまずお目にかかれません。アツモリソウ＝お金になるということで、業者はトラックで根こそぎ盗掘し、地元でも心無い人は小遣い稼ぎにとこぞって盗掘したそうです。寒冷地の明るい草地を好む為、背丈の低い草むらにこのピンクの美しい花はあまりにも目立ち、欲深い人間の格好のターゲットとなってしまった悲しい蘭です。高山性で栽培が難しいことから、素人が入手しては枯らし、また盗掘品を購入する、という悪循環が平然と繰り返されてきました。



中部地方以北の亜高山帯に自生します。

アツモリソウ（長野県　10.5/29）

絶滅危惧種の多いラン科植物の中でも本種は数少ない「特定国内希少野生動植物種」に指定されており、許可無く栽培及び販売をすることが法律で禁止されております。本来ならばここまで危機的状況になる前に手を打つべきでしたが、保護活動に対する注目度が高まり、厳重な保護管理により個体数の減少にはやや改善が見られるそうです。

このように危機的な状況を理解し注目度の高い蘭よりも、実は厳格な保護活動がとられていないナゴランやカンラン、フウランなどといった人気のある蘭のほうが野生絶滅に近いのかもしれません。

未だにインターネットや露天で平然と盗掘株が売られており、そのことに世間があまりに無関心なのも大きな問題です。

なんにしろこのアツモリソウをきっかけに、「自然下での生育環境を末永く保全する」活動が多種にも広がり、本当の意味での自然保護ということに一般の人が関心を持ち、当然のように行動できるようになって欲しいと願います。

Document and photo by LittleFlower 2010

本種を専門的に栽培、増殖している業者さんもいますので、お金さえ出せば入手は容易です。
　但し前述のように栽培は難しく貴重な蘭なので、由来のはっきりした固体を計画的に増やして自生地の復元をはかる、など明確な理由がない限り栽培はおやめ下さい。
　都市部での栽培には莫大なお金と時間、情熱が要ります。夏の暑さは厳禁ですし、適度な潅水、通風、日照も必要です。ある程度知識があり、冷房、換気ファン完備のガラス温室をお持ちで十分なお金と手間をかける時間を作れる無職の方ならきっとうまく栽培できるでしょう。もしそういう方が見えましたら、本種だけでなく危機的状況の動植物保全のために少しでもお力を貸して頂ければ幸いです。（今の筆者にそこまでの力が無いのが悔やまれます）
　増殖は低地では望めるものではありませんが、無菌培養による増殖が行われています。また個人栽培では株分け、バルブ吹かしが一般的です。

アツモリソウ（長野県　10.5/29）

アツモリソウ（長野県　10.5/29）

　近縁種（地域変種）としては濃紅色のホテイアツモリソウが有名です。特に釜無川流域のものは花も立派で色が濃く、釜無ホテイアツモリソウとして珍重されています。
　また、北海道最北端の礼文島にのみ自生する純白のレブンアツモリソウ、北海道の一部と礼文島に稀産するカラフトアツモリソウ（大陸形アツモリソウの隔離分布と思われる）、細身で黄色の花を咲かせるキバナノアツモリソウ、その赤花タイプ（大陸形）で秋田県の一部にのみ稀産するチョウセンキバナノアツモリソウ（エゾノクマガイソウ）などがあります。
　また、低山帯に自生する大型で扇状の葉が特徴的なクマガイソウ、（毛の無いタイプをヒタチクマガイソウと呼び分けることもある）、小型で二枚場の下に小さな花をつけるコアツモリソウもアツモリソウ属に分類されます。

アツモリソウ（長野県　10.5/29）

アツモリソウ（長野県　10.5/29）